様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 １０ 日現在

機関番号：３４４２１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０１１１２

研究課題名（和文）アートマネジメント人材育成における共創に向けたコミュニケーション能力の養成

研究課題名（英文）Fostering communication skills for co-creation through art management human resource development

研究代表者
志村　聖子（SHIMURA, Seiko）

相愛大学・音楽学部・准教授

研究者番号：３０７３６７６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アートマネジメント人材に求められる能力の多様化に着目し、①国内外の事例調査や文献調査をもとに、②専門人材に求められる対応領域の広がりを把握し、③芸術教育や関連政策における対応のあり方を考察するものである。主な成果として、①舞台芸術（伝統芸能を含む）におけるコミュニケーションプロセスや成果の蓄積・可視化をアーカイブ概念をもとに考察し、②伝統芸能の持続可能な継承に向けた人材育成の方向性を示し、③洞察を中等教育における芸術教育に統合してきたオランダの事例をもとに、芸術教育の理論的・政策的基盤の形成に関わる主要な論点を明らかにし、学会発表および日本語・英語論文等で公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
芸術と社会の間をつなぐアートマネジメント人材には多様な能力が必要とされるが、大学等高等教育機関で獲得されるべき能力や教育内容は必ずしも明確化されていない。本研究ではコミュニケーションの多様化、および芸術に関わることで獲得されうる能力に焦点をあて、舞台芸術活動の記録・保存・公開のためのアーカイブ概念や、伝統芸能の持続可能性など、従来のアートマネジメントが直接の対象としてこなかった領域における能力養成に向けた検討を行い、専門教育の充実に向けて新しい知見を提示した。

研究成果の概要（英文）：This study focussed on the diversification of skills required for human resources in the field of art management, through (1) understanding the current situation using case studies and literature reviews in Japan, the Netherlands, and abroad; (2) understanding the expansion of the area required for art management based on changes in social situations, and (3) considering the framework to improve art education and related policies in the future.
The main achievements are (1) the significance of introducing the concept of archiving in performing arts (in Japan) in order to protect and disclose the process and accumulation of communication, (2) the inadequacy of human resource development in the management of traditional Japanese performing arts that face the challenge of sustainability, and (3) the main issues that have formed the theoretical foundation of art education and policy in the Netherlands, which has integrated reflection into art education.

研究分野：アートマネジメント

キーワード：アートマネジメント人材育成　アートマネジメント教育　芸術教育　コミュニケーション　伝統芸能

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

わが国では1980年代以降、全国の自治体において公立文化施設が急増し、ハードが整備された一方、施設が十分に活用されないなどソフト面の充実が課題となり、1990年代以降、施設の運営や企画制作を担うアートマネジメントの必要性が認識されるようになった。それに伴い、アートマネジメントに携わる人材を「育成」することが社会的に要請され、2000年以降、専門人材の育成を図るため、大学等教育機関においてアートマネジメント講座・学科が開設される例が増加している。

もっとも、近年「社会包摂」といった社会的ニーズや「すそ野の拡大」といった文化政策の見地からの要請に応える形で、アートマネジメントの活動内容・形態が広がるとともに、プロジェクトに関わる主体も多様化しており、アートマネジメントの現場で行われるコミュニケーションは複雑化、高度化している。このような変化のもとで、多様な他者と関わり、違いを乗り越えて、共に創造していく能力を養成していくことが重要な教育的課題となっている。

２．研究の目的

本研究は、これからのアートマネジメント人材に求められるコミュニケーション能力に焦点をあて、高等教育機関のアートマネジメント教育において、かかる能力を養成していくための基礎的な枠組みを考察することを目的とする。

近年、アートマネジメントの活動内容・形態が広がるとともに、大学等でもプロジェクト型教育が推進されている。しかし、従来の研究では、個別のプロジェクトに関する事例研究にとどまるものが多く、人材育成のあり方に着目した研究は著しく限られている。中でも、アートマネジメント教育における「芸術」の位置づけや、芸術を通して養成される（べき）能力という観点からの検討は十分になされていない。

本研究は、このような現状および社会状況の変化を踏まえ、今後のアートマネジメント教育および文化政策における具体化や充実に資することを目指すものである。

３．研究の方法

本研究は、国内外における実態調査および文献調査を主としつつ、これまでの研究成果や筆者が関わる教育プロジェクト等から得られた知見を活用して遂行した。

研究の手始めとして、日本におけるコミュニケーションの特徴に関する分析を文献調査をもとに行い、芸術教育における学び方の変遷や獲得されうる能力についての分析をオランダの芸術教育を事例として行った（2017年度）。

その上で、コミュニケーション・プロセスの集積を可視化するとの観点から舞台芸術における「アーカイブ」概念に着目し、その社会的役割や専門人材の能力に関する文献調査のほか、各国の事例調査を行った（2018年度）。

また、アートマネジメントの対象領域の拡大という社会的要請から、伝統芸能の分野において求められる人材の能力養成を把握するための基礎的調査を行った（2019年度）。

さらに、これまでの調査結果を踏まえ、芸術教育や関連政策との接続について検討した。特に、リフレクション（洞察）を芸術教育に統合してきたオランダの事例をもとに、芸術教育の理論的・政策的基盤を形成してきた論点や議論の推移を考察し、今後の専門教育の充実に向けた方向性を検討した（2019年度）。

４．研究成果

（1）2017年度：コミュニケーション能力養成をめぐる問題点の分析

初年度はまず、日本におけるコミュニケーションの特性を文献調査により整理し、コミュニケーションの特徴（言葉以外で伝達される情報が多い、いわゆる「ハイコンテクスト文化」）とアートマネジメントにおいて求められる「共創に向けたコミュニケーション」の関係を検討することとした。

まず、アートマネジメントの現場におけるコミュニケーション上の課題の現状を把握するため、現職者に対する意識調査と事例収集を行い、多くの現職者が、日常的にコミュニケーションの問題が生じていると認識する一方で、組織レベルにおいてはコミュニケーションの問題が「対処すべき重要な課題」としては十分に認識されていない実態があることを把握した。

そのうえで、これからの専門人材に必要とされる能力が芸術に関わることを通してどのように養成されうるのかを検討するため、オランダの芸術教育（Culturele en Kunstzinnige Vorming, 略称CKV）を対象として調査を行い、現状把握に努めた。近年の芸術教育（2017年8月改訂CKV）では、実践（作品制作、楽器演奏等）や鑑賞にとどまらず、芸術体験を科学的に洞察し、他者に対して「表現」できることを求めるように変化しており、そこには芸術科目における学び方や養成される能力への認識の変化が影響していることを明らかにした。また、ここでの「表現」は、大きく(1)芸術作品や芸術体験を（芸術に特有な言語・非言語を用いながら）表現する技法と、(2)論理的に人々とディスカッションする技法の２つが念頭におかれていることが明らかとなり、芸術に関わるコミュニケーションの基盤となる表現技法についてはいずれにも焦点をあてて養成の可能性を探る必要があることを把握した。

これらの作業を通じて、アートマネジメント教育におけるコミュニケーション能力養成のあり方を具体的に検討していくための基盤を形成することを試みた。

（2）2018年度：言語化・可視化・共有化に関する検討

2018年度は前年度に続き、オランダの芸術教育に焦点をあて、オランダ社会における芸術教育の意義への認識や、表現・洞察に関する能力養成への理解がどのように理論的、政策的に基盤づけられてきたかを明らかにするための文献調査を行った。文献は主として3つの領域（芸術教育、政策、研究者）における議論に分けられ、それらを組み合わせて年代順に整理することで、歴史的経緯や社会的状況の変遷とともに芸術教育の目的への認識や内容が変遷していること、さらに文化政策（時代により福祉、教育政策）の変遷を辿ることにより、当時の政策立案者の問題意識や議論の過程が政策にいかに反映され、芸術教育の理念や政策の責任主体の明示などに具体化されてきたかを明らかにした。

あわせて、新たな社会的要請に伴うアートマネジメント人材の活動領域の広がり、および、関与する人々の多様化に着目し、アートマネジメント領域におけるコミュニケーション概念を拡大、再検討する必要があるとの認識のもとで検討を進めた。具体的には、コミュニケーションのプロセスを組織において可視化する必要性、および、コミュニケーションプロセスの集積としての活動成果を社会に対して可視化していく必要性の観点から、アートマネジメントにおけるアーカイブ概念に着目し、国内外の文献調査を通してアーカイブの歴史的意義や社会的役割等を概観した。また、舞台芸術のアーカイブに関する国際会議に参加したことを契機に、各国の舞台芸術アーカイブ事例をフィールド調査により把握し（オランダ、フランス、イギリス、香港ほか）、その目的や内容の多様性、共通性、および全体像を把握した。

（3）2019年度：アートマネジメントの領域拡大と新たなコミュニケーション概念の必要性

最終年度は、前年度に続き、アートマネジメント領域（および人材）が新たな社会的要請にどのように応えられるのかという観点から、人材育成において考慮されるべき分野や知識を検討し、新たなコミュニケーション概念を整理するとともに、今後の養成のあり方を見出すことを目指して研究を進めた。

まず、前年度の成果から、実演芸術に関する過去の活動情報の蓄積や可視化、公開といったアーカイブ概念との関わりについても考慮しつつ、マネジメントに携わる人材育成のあり方を考察した。具体的には、筆者の勤務校の所在地である大阪の歴史と地域性に着目し、伝統芸能の持続可能な継承という社会的要請に鑑み、人材育成プログラム（相愛大学「次世代の伝統芸能コーディネーター育成プログラムの開発と実践」）を運営しつつ調査を進めた。その結果、浮き彫りになった問題点（伝統芸能のジャンルの特性や地域性への理解、及びそれらに立脚した固有の芸術的価値への理解、地域

の支援政策や組織との協働のあり方、伝統芸能におけるアーカイブ概念等）について論考し、伝統芸能の持続可能性におけるマネジメント人材育成の方向性という観点からまとめ、国際学会で発表した。

合わせて、初年度からの研究対象としてきたオランダの芸術教育と関連政策に焦点をあて、芸術教育の学習プロセスの中心に「自己の文化的発展についての洞察」を据え、実践活動のみならず鑑賞（受容）や洞察を含む活動へと統合してきた過程を概観し、その背景にある社会状況の変化への認識や議論の推移を考察し、英語論文（査読付）として公表した。

以上から得られた研究成果の一部は既に国内外の学会で発表、論文等で公表しているが、今後、未発表の部分についても論文として取りまとめ、学会誌等へ投稿予定としている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Seiko Shimura	４．巻 April 2020 edition
２．論文標題 Integration of Art Education at Universities: Focusing on Art Education (CKV) Discussions in the Netherlands	５．発行年 2020年
３．雑誌名 International Society For Education Through Art (InSEA), Asia Regional Congress, 2018, Hong Kong & 7th World Chinese Art Education Symposium	６．最初と最後の頁 109-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 志村聖子	４．巻 第36巻（通巻第71巻）
２．論文標題 人形浄瑠璃文楽に対する公的支援とマネジメントの課題：国・自治体の役割に着目して	５．発行年 2020年
３．雑誌名 相愛大学研究論集	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 志村聖子	４．巻 20
２．論文標題 芸術の自律性とクリティシズム	５．発行年 2020年
３．雑誌名 アートマネジメント研究	６．最初と最後の頁 71-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Seiko Shimura
２．発表標題 Future of creativity and accessibility of Bunraku: Challenges of cultural policy and management of intangible cultural heritage in Japan
３．学会等名 The International Association of Libraries and Museums of Performing Arts (SIBMAS), Paris 2018, Bibliotheque nationale de France（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Seiko Shimura
２．発表標題 Integration of art education at universities - focusing on art education (CKV) discussions in the Netherlands
３．学会等名 International Society for Education through Art (InSEA) Asia Congress, Hong Kong, The Education University of Hong Kong（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 志村聖子
２．発表標題 大学におけるアートマネジメント人材育成と芸術教育のあり方に関する考察--オランダの芸術教育（CKV）をめぐる議論に着目して--
３．学会等名 日本アートマネジメント学会九州部会と文化経済学会＜日本＞九州部会の連携による共同研究発表会、佐賀大学
４．発表年 2018年

１．発表者名 志村聖子
２．発表標題 舞台芸術におけるアーカイブをめぐる論点と展望：海外の文化政策と事例をもとに
３．学会等名 文化経済学会＜日本＞、2019年度研究大会、名城大学
４．発表年 2019年

１．発表者名 Seiko Shimura
２．発表標題 Sustainable development of traditional performing arts: A balance between tradition and innovation, public and private support
３．学会等名 ENCATC, the European network on cultural management and policy, Burgundy School of Business, Dijon, France（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 志村聖子
２．発表標題 舞台芸術におけるアーカイブ概念を考える--アートマネジメント領域との関連に着目して--
３．学会等名 日本アートマネジメント学会九州部会と文化経済学会＜日本＞九州部会の連携による共同研究発表会、活水女子大学
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考